



TITLE:

巻頭言: 人口減少・超高齢化に立ち  
向かう小さな美しい村

AUTHOR(S):

谷口, 栄一

---

CITATION:

谷口, 栄一. 巻頭言: 人口減少・超高齢化に立ち向かう小さな美しい村.  
安寧の都市 --医学・工学からのアプローチ (Liveable Cities) 2015: 4-7

ISSUE DATE:

2015-01-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/193526>

RIGHT:

# 人口減少・超高齢化に立ち向かう 小さな美しい村

谷口栄一 安寧の都市ユニット ユニット長／京都大学大学院工学研究科教授

将来の日本の人口が減少し、高齢化率が増加することが予想されている。特に地方部でその傾向が著しいという予想である。2040年までに地方自治体の半数が消滅するおそれがある（日本経済新聞、平成26年5月8日）というショッキングな記事まであらわれている。しかし、これはほんとうだろうか。多くの地方自治体が人口減少・超高齢化に対処しており、地方自治体の半数が消滅することにはならないのではないだろうか。

先日、和歌山県北山村を訪問して奥田貢村長さんにお話を伺う機会があった。北山村は人口約440、高齢化率が約50%の僻地、自然が豊かな小さな美しい村である。和歌山県の飛び地であり、奈良県と三重県に接している。大阪から車で約3時間10分、名古屋から約3時間20分かかる不便な村である。

すでに消滅するかどこかの市と合併してもおかしくないような小さな村であるが、驚いたことにとても元気な村である。奥田村長を先頭に北山村として、①「じゃばら」に関連する産物の生産・加工・販売、②北山川の筏下りやラフティングなどの観光、③ICT (Information and Communication Technology) による情報発信、④福祉、⑤教育振興、に積極的に取り組み、経済が活性化されると同時に村人は充実した健康的な生活を送っておられるようにみえる。

北山村はもともと林業が主な産業の村であったが、低価格の外国産の木材に押されて林業が成り立たなくなってしまった。そのために人口も減少したが、北山村にしか自生していなかった柑橘類のじゃばらの木を増やし、全国にじゃばらのジュースやゼリー



を販売するようにしたところ、それが花粉症に効果があるということで全国的に人気商品となった。

筏下りやラフティング、カヌーも人気があり、年間に約10万人の観光客が北山村を訪れる。奥田村長は、観光客を20万人に増やしたいという希望をもっておられる。北山村は「筏の村」、「じゃばらの里」としてのブランド化に成功している。

また、ICTを十分に活用しており、「村ぶろ」という名称のインターネットサイトを運営し、全国の市町村の情報発信の場を提供している。村の財政も健全である。若い人が都会に出て帰ってこないという現象はこの村においても見られるが、都会からのUターン、Iターンもあり、平成に入ってから村の人口は横ばいとなっている。福祉面も充実しており、この村には孤独死はないようである。教育面では小中一貫教育を実施しており、村の小中学生を海外研修に行かせる補助金も支給している。

これは一種のサクセス・ストーリーであるが、北山村の成功の理由として、小さい村だからこそ意思決定が早く、また僻地だからこそICTをぞんぶんに活用しており、さらに小さい村だから村役場の職員が一人で複数の役割を果たしていることを挙げることができる。また、平成の大合併のときに隣の大きな市と合併する話もあったが、結局合併しなかったことによって、かえって強い

危機感をもって村人たちが団結して働いている点も特筆すべきである。村には一つの診療所があって、お医者さんが常駐しているが、病院については他の都市に頼らざるを得ない。患者さんの救急搬送については村役場の職員が交代で当たっている。

このように小さい村であっても、有能なリーダーがその村の特徴を生かした運営を行えば、十分にやっていけることがわかる。したがって人口が減少し、高齢化が進むと自動的に小さな市町村は破たんし、消滅するというような乱暴な議論は成立しない。むしろ、小さいが故の利点を生かし、特産品を販売し、ICTを活用すれば、生き残れるチャンスは十分にあると考えられる。大きな市と合併したためにかえって小さな村が埋没してしまうという危険のほうが大きいかもしれない。

北山村の成功例は、今後の日本の人口減少社会における市町村運営に大きな示唆と勇気を与えてくれる。北山村は特別な村ではなく、日本各地にありそうな村である。地理的な条件、産業の条件は他の市町村と比べて厳しいにもかかわらず、それを乗り越えて立派に運営されている。1次産業、2次産業、3次産業を融合した6次産業化を農林水産省が推進しようとしているが、北山村ではじゃばらという農産物の生産、加工、eコマースを活用した流通を通じて6次産業化をすでに実践している。また、間伐材を活用したバイオマスによる自然エネルギーの利用など、環境に優しいエネルギー開発と地産地消についても取り組んでいる。

このような取り組みを行うには人材育成が常に課題として指摘される。それでも、リーダーが具体的な目標を明確に示し、それに向かって職員が問題解決を図ろうとする環境があれば、人材はおのずと育つようである。北山村で現在はICT活用の中心的役割を果たしているある職員も、最初はまったくの素人で、村長から村のホームページを作るように言われたときに、「ホームページって何ですか」と問い返したそうである。

将来の日本の社会を考えると、人口減少、超高齢化という厳しい条件があるとしても、その条件の下で生き残りをかけてチャレンジする人たちがいる限り、社会は持続可能な発展を遂げる

ことができるのではないだろうか。北山村はそのような明るい希望を持たせてくれる。限界集落といわれる集落であっても、実は限界はないのではないかと思わせる。限界を設けなくて可能性を試してみることが重要であり、失敗してもまたやり直すことを許すシステムが必要であろう。

日本の何千年にもわたる伝統の強さも重要な観点であり、日本の伝統的な村というコミュニティのもつ力が大きな作用を及ぼしているとも思われる。お互いに助け合う気風や、自然を恐れ、自然と一体となった生活、神を敬う心が、意外にも現代の6次産業化やICTの活用においても生かされている。都会の多くの人々が求める心の癒しもまた、日本の伝統的な村の暮らしの中に存在しており、都市と山村との人的な交流を進める中で発見されるものであろう。

そのような点を考慮すると、限界集落と位置付けられるような日本の小さな美しい村が逆に人の暮らしに光を与えることができる力をもっていると思われる。北山村に限らず、日本各地にこのような小さな美しい村はある。そのような村がそなえている無形の力が人々を元気にすることができるのではないだろうか。